

## 捨て子と帝国

ロンドン・ファウンドリング・ホスピタル (1741-1954)

吉 村 (森 本) 真 美

Foundlings and the Empire:  
The London Foundling Hospital 1741-1954  
Mami MORIMOTO-YOSHIMURA

### はじめに

1741年にイギリス初の捨て子院としてロンドンに設立されたロンドン・ファウンドリング・ホスピタル (The London Foundling Hospital 以下、ホスピタルと略) は、親に遺棄された子どもを収容・養育する同種施設の先駆的モデルとして評価を得るとともに、18世紀イギリスにおける博愛主義精神のひとつのシンボルともなっている。1937年に収容施設が移転した跡地にロンドン本部として建てられた事務所は、現在はミュージアムとなっており、19世紀後半以降の施設や子どもたちの写真、母親がわが子を手放す際に持たせたトークン (token「形見」) など、関連するさまざまな資料を展示している。

しかし来場者の目をひきつけるのはむしろ、ロココ調の内装とも調和する、この団体が所有する絵画や彫刻であろう。中でも特筆すべきは、国民的画家ウィリアム・ホガース (William Hogarth 1697-1764) の代表作のひとつ「フィンチレイへの行進」(The March of the Guards to Finchley 1749-1750) をはじめとする、18世紀後半以降のイギリスの著名な芸術家による油彩画や彫刻の数々、そしてゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル (Georg Friedrich Händel 1685-1759) の楽譜や蔵書、書簡などの手稿類からなる貴重な史料コレクション (Gerald Coke Handel Collection) であろう。19世紀以来、これらの芸術的資産によってミュージアムがアピールしようとするホスピタルの歴史的特色のひとつは、芸術によるチャリティ支援というその「先見の明」であるようだ。

学術領域においても、このようなチャリティと芸術の関係を論じた美術史領域の研究が近年とくに成果を重ねてきているが<sup>1</sup>、歴史研究の対象としてホスピタルを本格的に取り上げたのは、記録史料としての性格が強いニコルスとライの著作 (1935) を除けば<sup>2</sup>、1981年のマックルーによる通史がパイオニア的研究であり、これが今日なお権威を保っている<sup>3</sup>。18世紀に補助金を受けた経緯もあって、議会資料はもとより、理事会議事録、請願書、洗礼記録、査察台帳、有力パトロンの書簡など、ホスピタルの運営にかんする同時代史料は、質量ともにかなりまとまったかたちでロンドン・メトロポ

リタン文書館（The London Metropolitan Archives）に集積されており、国立文書館（The National Archives）にも関連の史料が多数収蔵されている。これらの豊富な史料をもとに、ホスピタル研究は今世紀に入ってさらに展開を見せ、レヴェンによる収容児の養育や健康状態、死亡率などのデータの詳細な分析や<sup>4</sup>、シーツ＝グエンがジェンダー史の視点から子を託した母親に注目した論考<sup>5</sup>、制服と軍楽隊（Army Bands）との関係に注目したグレッドヒルの論考など<sup>6</sup>、多様なアプローチが試みられている。

ホスピタルの活動は20世紀まで続いたが、マックルーの通史をはじめ、これら先行研究のほとんどは18世紀中期から後半の設立・確立期を扱っている。活動期間全般をフォローした近年のピューの通史では、19世紀にかなりの紙幅が割かれているが、それは著名な支援者であったチャールズ・ディケンズおよびその作品との関わりについての言及に集中している。<sup>7</sup> このような傾向は、当該時期の史料の充実に加え、ヨーロッパにおける博愛主義の伸張や、このような活動を主導した中間層（middling sorts）の台頭、貧民処遇をはじめとする社会問題への対応をめぐる民間の任意団体と公権力との対抗・協力関係、ならびにその際つねに問題になるイギリス国教会と非国教会系諸セクトの対立など、イギリス近代史研究の焦点となっているさまざまなテーマとの接点が、ホスピタルとその周辺にみられることにも由来しているだろう。

マックルーやピューの著作をはじめ、18世紀から20世紀にいたるホスピタルの活動期間全体をカバーした通史の多くでは、19世紀におけるホスピタルの活動には、18世紀のそれと比して目立った変化がなかったとされている。<sup>8</sup> 実際、施設拡張や運営方針の大きな転換を繰り返した18世紀とは異なり、19世紀のホスピタルは原点に立ち返って「コーラムの理想」を守ることを目標に掲げ、この激変の時代にあって前世紀の方針を順守した活動に終始したという。本稿が注目するのはこの点である。すなわち、周知のようにイギリスの19世紀は、チャリティ熱の時代であった。任意団体を中心にさまざまな社会的弱者の救済事業があまた企図され、ノブレス・オブリージュが自明の義務であったジェントルマンのみならず、さらに下方の社会階層の人びともがこぞって「弱者の救済」へと駆り立てられた。とりわけ貧困層の子どもたちを対象としたチャリティは、子どもという存在そのものへの社会的関心の高まりともあいまって、きわだった活況を呈していた。工場法運動にも尽力したシャフツベリ伯のラグド・スクール運動、非行少年の帝国移民を推進したプレントンの児童支援協会の活動や、ドクター・バーナードの孤児院運営など、「子どもの救済者（child savers）」と呼ばれた人びとによる、「ストリート・アラブ（street-Arabs）」に代表される悲惨な境遇の都市の貧困児童を、「イギリスの最深部（in darkest England）」<sup>9</sup>から救い上げようとする動きが、これを帝国事業と結びつけた世紀転換期におけるピークにむかって展開した。

諸団体の事例が示すように、このような子ども救済運動全般の活況は、個々の団体や個人の競合という状況をもたらした。すなわち篤志の寄付や公的助成、当局に与えられる認可や評価、公権力を背景とした権限、さらにはこれらの活動を指導した「子どもの救済者」たちの社会的名声の奪い合いである。とりわけ重要だったのは施設運営資金の確保であり、争奪競争に敗れた団体はすぐさま解体を余儀なくされた。この激烈な競争に生き残るために、各団体は、有力な宗教系団体などとの提携によっ

て守りを固めるとともに、時代の風潮とその要求に即した運営改革にいそしみ、メディアを積極的に活用した宣伝を行って、他団体との差異や「成果」の大きさをアピールすることに腐心した。類似チャリティ間の競争というこの要因は、子ども移民運動（child migration movement）をはじめ、世紀転換期における子どもチャリティに付随するさまざまな問題を解明するうえでの、きわめて大きな要因であると筆者は考えている。

冒頭で述べたように、ホスピタルはこのような子ども救済チャリティの先駆的存在であるが、それだけにはとどまらない。18世紀後半から20世紀初頭にかけてのイギリス社会を特徴づける、任意団体の形成とその活動全般を視野に入れば、ホスピタルを、以降への影響がきわめて重要な団体であると位置づけることにも大きな異論はないだろう。さればこそこのチャリティ熱の時代における、ホスピタルの「停滞」は何を意味するのだろうか。本稿は、19世紀における子ども救済運動、とくに世紀転換期における子ども移民運動の伸張を念頭におきつつ、設立以降のホスピタルの歩みを概観し、前述の問題意識に関連して注目すべき諸点を提示することで、近代イギリスにおける子ども救済事業としてのホスピタルの史的意義を新たな方向から考える道筋を示すものである。

以降、第1章においてはホスピタルの救済対象であった捨て子に関連する諸点について、近世ヨーロッパならびイギリスの特徴を述べ、第2章では18世紀中期におけるホスピタル設立の経緯を、史料および先行研究をもとに概観する。第3章では19世紀における子ども処遇についての文献に示されるホスピタルについての理解・評価を、同時代に展開した子ども救済運動との関係を視野に入れて考察する。

## 第1章 「捨て子の時代」のイギリス

子ども史におけるヨーロッパ近代のひとつの特徴的な様相は、この時期が歴史的にみて「捨て子の時代」であったことである。<sup>10</sup> この時期における関心の高まりの所産として、カニンガムは慈善事業の世俗化という現象を指摘している。<sup>11</sup> 彼が捨て子院の事例で紹介しているように、イタリアやフランスの諸都市では、捨て子の保護と養育は伝統的にこれを担ってきた教会を中心としつつも、この時期には人的資源の有効利用という経済的な発想と結びつき、市民の参与や当局との連携がみられるようになった。

カニンガムが示す事例はもっぱらカトリック世界についてのものであるが、プロテスタント圏はかなり事情を異にする。イギリスについていえば、ホスピタルの設立まで、捨て子を専門に収容する施設は公民とともに不在であった。プロテスタント諸国における捨て子院の少なさと、これに対比されるカトリック諸国の捨て子および捨て子院の多さは、子どもの処遇に関連する先行研究においてもしばしば指摘されている。<sup>12</sup>

親がわが子を「捨てる」状況は地域や時代によってさまざまなケースが想定しうるが、イギリスの場合は歴史人口学的にみて特徴的な傾向があることがわかっている。ラスレットをはじめとするケンブリッジ・グループの研究が明らかにしたように、近世イギリスは、晩婚や母乳育のもたらす意図的あるいは結果的な産児制限によってそもそも出生数が少なく、子どもの多い多産多死社会という、ア

リエス以来のカトリック圏をもっぱら対象とした子ども史研究が描き出してきたイメージとは、いささか違った様相を呈していたであろうことが推測されている。<sup>13</sup>

捨て子は「不義の子」、すなわち非嫡出子（illegitimacy）と同義であったが、教義上の理由からこれらの洗礼を受けていない魂の救済を重んじたカトリック世界とは異なり<sup>14</sup>、原罪を負ったうえに神の摂理からも法からも外れた「罪の子」とみなし、これを忌避する傾向がイギリスでは強かった。またさきにのべた出生率の全般的な低さは、非嫡出子にもおよんでいた。結果として捨て子の数そのものが大陸に比して少なかったという事実もまた、捨て子処遇への関心に影響を与えたであろう。イギリスでは捨て子は救貧法の保護下におかれ、ワークハウスで養育されたのち、成長すると徒弟に出された。教区にとっての厄介者であったことには違いないが、子ども人口が人口の3分の2を占めていた19世紀の社会改良者たちを駆り立てたような様相とは、少なくとも数の上ではかなり異なっていたと考えるべきであろう。

ただ、この時点までの変化ということでは、イングランドにおける非嫡出子率は17世紀初頭から下降して世紀後半に底をついたあと、18世紀後半にかけて著しい上昇をみている。同様のカーブを描く婚前妊娠率よりもその傾斜は大きく、1830年代後半頃まで上昇を続けた。<sup>15</sup> ラスレットはこの変動について、17世紀前半のピューリタニズムの隆盛の影響を指摘しつつも、結婚年齢や婚前妊娠率変動との比較ともあわせ、さらに複雑な要因の検討の必要性を指摘している。<sup>16</sup> コーラムが捨て子院設立をめざして訴えた「捨て子の増加」は、大陸諸国との比では劣るものの、イギリス国内においてということでは、それ以前の時代にくらべて際立っていたといえる。

## 第2章 コーラムと捨て子問題

むろん捨て子への関心を喚起するのは、数ばかりではない。生後間もない乳児の遺棄は、少なからぬ結果としてその死を意味した。1720年ごろトマス・コーラム（1668-1751）は、誰にも顧みられることなく路上で命を失ってゆく、そのような子どもたちの姿に心を動かされた——学術研究を含め、ホスピタルの歴史はこのような情緒的記述で始まるのが常であるが、これは個人の資質としてのみとらえられるべきではないだろう。コーラムが示したような弱者に対する「慈悲深さ」は、18世紀という啓蒙の時代に生きた人間の心性のひとつの特徴である。また彼の経歴を振り返ると、彼が捨てられ死んでゆく子どもたちにたいして持った衝動的な感情には、憐憫の情にはとどまらない別の要素が含まれていたであろうこともうかがえるのである。

コーラムは、ドーセットにおいて船長の子として生まれ、26歳のときに造船技師として同朋を率いて北米植民地に渡った。立身に有利な出自や財産を持たず、本国での将来の見通しがさして明るいわけではない同時代の貧しい若者は、しばしば年季奉公人として北米植民地に渡ったが、出自と職業からすると、コーラムの場合はこれよりも積極的に見込みのある新天地での事業展開をめざした感がある。また、そのような「海へ行く」という判断は、ドーセットを含むイングランド南西部の若者たちがしばしば好んで選んだ道であった。<sup>17</sup> 新大陸の豊富な森林資源は、海外進出をすすめるイギリスにとって、優良な造船資材として定評があったバルト産のそれに匹敵する魅力的な商品であり、造船

業に携わるコーラムも、ここに目をつけたものだと思われる。

ボストンに建設した造船所は順調に操業を続け<sup>18</sup>、同地で妻をも得たコーラムであったが、1704年にはイギリスに帰国した。成功した北米移民、とりわけ土地を得て農場経営で財を成した移民には、現地で定着してその支配層を形成してゆくというパターンが多くみられるが、コーラムは造船所を置いたままで自身は妻と帰国している。ピューリタン勢力の強い現地で熱心な国教徒だった彼が不遇をかかったことなど、背景には諸事情があったようだが、結果的にいえばカリブなどで成功者がたどった不在化に類似したパターンであるといえる。伝記で語られる帰国後に得た「商人としての成功」は、言い換えれば現地における造船所の運営を、ロンドンに拠点をおき大西洋を横断した帝国事業に展開したということであろう。この際に北米滞在中に得た現地での情報と経験、そして人脈が機能したことはいうまでもないが、これらは彼が企画したチャリティにも影響を与えた。とくに、現地では少数派であった国教徒の彼が勢力の拡大のために尽力したことは、後年の捨て子院の設立と運営にも有利に作用することになる。

ひとかどの地位と財を築いたこのような中間層市民が、さらに成功してジェントルマンへの上昇を狙う同朋と同じく、社会的弱者にたいするチャリティにこぞって邁進するようになるのは、一般にはもう少し後の18世紀後半以降に顕著な現象であるとされている。その意味で言えば、1722年に捨て子院設立に動き始めたコーラムの事例は、たしかに先駆的であると評価することができるだろう。またコーラムのキャリアと帝国との関連を考慮すれば、捨て子の救済に彼を動かした動機が憐憫だけでないことは明らかである。コーラムが渡った時期の北米植民地は、植民初期に比べれば渡航も安定して、初期段階の入植地に顕著な男性偏重の性比バランスもいくぶん改善されつつあったが、いまだ女性も生まれる子どもも、本国にくらべれば多くはなかった。ニューイングランドはまた前述のように、厳格なピューリタニズムが支配的な土地柄であった。この宗教的・道徳的土壌は、非嫡出子にたいする人びとの態度を、少なくとも慎重にしたりろう。不義の子が路上に捨てられ、さらされるというロンドンの光景にコーラムが衝撃を受けたのは、それが日常ではなかった彼の帝国経験も影響しているかもしれない。

コーラムの時代になると、北米植民地の死亡率はかなり改善されていたが、開発の進行にともなう労働力需要はますます高まっていた。また、フランス、スペインなど他の帝国勢力（imperial rivals）との対立関係の激化で、現地でのイギリス人兵士の需要も増し、戦時には民兵として戦力になるべきイギリス人住民を増加させる必要が説かれていた。このような植民地の状況が、本国の見込みのない貧しい若者たちが任意・強制移民として大挙海外に向かう流れを作ったわけであるが、これと同時に力を得てきたのが、移民の流出による人口減を国家の一大危機と唱える人口減少説である。

<sup>19</sup> 植民地における労働需要をうけて、本国から植民地への有用な人間の流出が進んでいるが、かれらはまた人口の再生産ができる世代でもあるので、結果としてイギリス本国の人口は著しく減少しており、これは国家の危機である—18世紀イギリスでは全国的な人口調査はまだ行われていなかったが、港湾の船舶乗員記録をはじめとする地方の小規模統計を根拠として、この「流出」の危機はさかんに喧伝された。



18世紀初頭から増加する北米への植民地流刑や、誘拐同然の方法で兵士を強制的に連行するプレス・ギャングなど、この時期数を増した植民地への強制移送は、「そのまま本国にいても役に立たない者たち」であるという点で、人口減少論が高まる中でも受け入れられる施策であった。捨て子院の設立に先立ってコーラムが企画した傷病軍人の北米移民もそのようなプランのひとつであったが、アン女王の死去に前後する混乱もあって機に恵まれず、また北米のピューリタン勢力の彼に対する反目もあって、実現にはいたらなかった。また、構想の初期からコーラムを支援し、自身も博愛事業に取り組んでいたジョナス・ハンウェイ（Jonas Hanway 1712-1786）にも、ここで言及すべきであろう。<sup>20</sup> ロンドンの商人で探検家でもあったハンウェイは、捨て子や孤児を保護して海兵に育成するマリン・ソサエティ（Marine Society）を1757年に設立したが、これもホスピタルと同じ不要な人的資源の有効利用を目したチャリティであり、ホスピタルと密接な提携関係にあった。<sup>21</sup>

### 第3章 ロンドン・ファウンドリング・ホスピタル

1722年、コーラムは数年来の構想であった捨て子救済事情に本格的に着手した。南海泡沫事件（1720）の記憶も新しいなか、ジョイント・ストック・カンパニーの発想による資金集めが賛同を得にくかったこともあり、企画は順調には進まなかった。しかし慈善学校運動やキリスト教普及協会の活動で知られる国教会聖職者トマス・ブレイの助力を後ろ盾に、女性を含めた上流階級の賛同者を集めて、1739年にいたりようやくロイヤル・チャーターを獲得した。チャーターによれば、「ジェントルマン、トマス・コーラム」は、「おのれの罪を隠さんとする親による殺人や、新生児を路上に捨てて死に至らしめる非人道的な慣習、あるいはかれらに怠惰や物乞い、窃盗を教え育てる」ことに心を痛め、請願を出したとある。<sup>22</sup> 法人はここに規定されたとおり、初代院長には賛同者のなかからベドフォード公爵が就き、その下に副院長6名、財務担当理事1名をおくなど、国王請願の際に名を連ねた三百数十名からなる組織によって構成された。

コーラムの構想から20年近くが経過した1741年3月に施設はようやく開所の運びとなり、第1回の子どもたちを受容した。対象は「生後2か月未満の病気に罹患していない乳児」であり、5時間で30名を受け入れたが、生後2か月を越えている、皮膚病があるという理由で、そのうちの2人が謝絶されている。受け入れた乳児はロンドン近郊の乳母に委託され、ある程度成長すると施設に戻されることになっていた。ホスピタルは翌月以降、毎月30人の受け入れを継続し、順調に運営されたが、ほどなく後年のチャリティでもしばしばみられる、組織上層部の内紛が発生する。結果、1742年の年次総会で、創設の最大の功労者であるコーラムは理事に選出されず、彼は以後ホスピタルとは関わりを絶った。1745年に現在ミュージアムがあるブルームズベリで新しい建物での運営が開始された。

現在再評価の動きが盛んなように、ホスピタルはまた多くの芸術家が支援者となり、その作品によって経営を助けたことでも知られる。ホガースは、コーラムの知己であったが、ホスピタルの趣旨に早くから賛同し、開所に先立つ第1回の理事会にも理事の一人として参加している。すでに名をあげていたホガースは、子どもたちの制服のデザインも手がけ、「フィンチレイへの行進」のほかコーラムの肖像を含む作品数点を寄贈している。ホガース以降もホスピタルと画壇とのコネクションは強く、

画家たちはホールをギャラリーに用い、作品を展示して来場者を集めた。ヘンデルも一時理事に名を連ねたパトロンの一人であった。ジョージ2世の代に移ってから作風が好まれず、不遇をかこっていた彼であるが、ホスピタルにおいて、彼の代表的作品としてすでに人気を得ていたオラトリオ「メサイア」を、自身の指揮で演奏し、これが評判をよんで再び表舞台に返り咲いている。パトロンの支援による芸術活動が一般的だったのは確かだが、芸術活動による公共的事業への支援というスタイルが斬新であったと位置付けられるかどうかには議論の余地があるだろう。しかしながら、ギャラリーがことに後援者となる社会層の集客装置として機能したことが、彼ら自身の創作活動のチャンスを拡大し、ひいては社会的地位の向上にもつながったことは間違いない。

18世紀後半にさしかかったところで、ホスピタルにはひとつの大きな転機が訪れた。運営は順調で、捨て子を引き受けるというその活動も広く知られるところとなっていたが、地方支部の設置を含めた施設の大幅な拡張と受容人数の増加によって運営経費は増大し、1856年に議会に補助金給付の請願を出している。5月に認可された最初の補助金は1万ポンドであったが、その条件は受容条件の緩和であった。翌月ホスピタルは、生後2か月を越えない子どもをすべて受け入れるという方針を定めた。翌年には補助金が3万ポンドに引き上げられたが、受容年齢は生後6か月未満、さらに12か月未満へと拡大され、受容数は激増した。対応のために作られた地方の分院や支部の運営が、さらに経営を圧迫するという負のスパイラルに加え、ホスピタルに当初から向けられていた私生児出産を助長するとの批判も高まった。1760年3月、ホスピタルは無制限受容を廃止し、「レスpekタブルな私生児」に収容者を限定した。この方針転換はホスピタルの性格を変え、ハンウェイも反対の意を表明している。1771年には補助金が打ち切れ、ホスピタルは完全な民間運営となった。

ホスピタルにはどのくらいの数の子どもたちが受容されたのであろうか。ホスピタルの公式記録からレヴンは1799年までの受容総数として、後掲の表1にみるように18,539名という数値をあげているが、その多くは補助金の代償に受容制限を緩和した時期の「議会の子どもたち (parliamentary children)」である。19世紀におけるホスピタル運営で最も大きな影響力を持ったJ・ブラウンロウは、自身が著した通史のなかで、この約4年間だけで年間3、4千名以上、計14,934名の子どもが託されたとしている。そのうち徒弟に出せる年齢まで生き延びた子どもは4,400名であり、死亡率は70%を超えた。<sup>23</sup> 18世紀を通じてみれば、カトリック圏の捨て子院のデータに比してこの数値は相対的には低いといえるが<sup>24</sup>、ブラウンロウをはじめ、同時代から多くの人々が指摘していたように、無制限受容を実施した期間にあきらかな死亡率の上昇がみられることがわかっている。<sup>25</sup> なおこの時期の子どもたちは、教区からの委託が72.7%を占めていた。<sup>26</sup>

レヴンによる請願書の抽出調査はさらに、これらの子どもたちの嫡出・非嫡出の状況をあきらかにしている(表1)。非嫡出子と明記されているケースの36.8%という数値と、「嫡出子」の20.1%という数値をどう判断するかは難しいところであろう。「母のみ記名」33.3%と「父親の記名もしくは言及あり」の9.7%をどのように扱うか—片親との死別とみなすか、「書けなかった」とみなすか—で判断は分かれるかもしれないが、合法的な子どもがこの時期に少なくとも2割を占めていたという事実は、養育放棄の助長という非難の根拠となりうる値とみることができよう。

レヴンはまたホスピタルの公式統計をもとに、1799年までのホスピタルに受容された子どものその後を実数と％で示している。（表2）64.9％という収容者の死亡率は全体に占める割合であるが、受容数から死亡数を差し引いた残りの6,506名を分母として再計算した、生き残った子どもの「その後」の割合も提示している。その結果子どもたちは、9割方が徒弟として施設を出たことがわかる。1人の「結婚」と、親が子供を取り戻しにきた3.4％のケースは、ともかくは祝福を受けて送り出されたであろう。死亡率は高いが、その大多数は入

所直後に洗礼を受けさせキリスト教徒となっていたことで、むしろ宗教的には「成功」とみなされるかもしれない。おそらくは不行状によって施設を放逐された50人と、「不明」の314人の計8.4％のみがあきらかな「失敗」とみなされた事例であろう。これらの数値が18世紀のホスピタルの現実であった。

#### 4. 19世紀のホスピタル

収容数の激増をともなった18世紀中期から後半にかけて、その理念をも揺るがせる動揺の時代を経て、19世紀に入るとホスピタルの活動は長い安定期に入る。大きなポイントとしては、世紀初頭に受容対象を「非嫡出子」に限定するとあらためて明言したことであろうが、それ以外の方針や施設運営に大きな変化がみられることはなかった。前述のように、この「停滞」が通史における19世紀の手薄さの原因になっているようだが、ジェンダー史においては、むしろこの時代のホスピタル研究が、性規範が厳格であった同時代にあって見えにくい存在であった「未婚の母」の実像を明らかにする手がかりとして、きわめて有効な位置づけにある。

ギリスは結婚観の研究において、妊娠した女性たちの周辺事情から結婚パターンの変化を読み取るにあたって、ホスピタルの請願書を援用している。未婚の娘が妊娠したとき、18世紀までは「ショットガン・ウエディング」に周囲の圧力で持ち込むという方法が一般的であったが、ホスピタルに請願書を出した女性はそれが成功しなかった、あるいはそういう手段をとらなかったケースである。新救

表1 1741-99年にLFHに受容された子どものその後

	数	%	*生存者6,506名に占める%
死亡	12,033	64.9	
徒弟	5,920	31.9	91.0
返還	221	1.2	3.4
結婚	1	0.0	0.0
追放	50	0.3	0.8
不明	314	1.7	4.8
計	18,539	100.0	100.0

Levene, *Childcare*, 2007, p.18 Table 2.2より作成 (Source: General Register)  
\*の数値は筆者

表2 1756-60年の捨て子の嫡出・非嫡出

	数	%
非嫡出	106	36.9
嫡出	58	20.1
母のみ記載	96	33.3
父について記載、もしくは言及あり	28	9.7
計	288	100.0

Levene, *Childcare*, 2007, p.32 Table 2.6より作成 (Leveneのデータは、期間内の受容申請書からの10%の抽出調査による)



貧法以降の非嫡出子の父親は、「逃げる」という方法をとりがちであった。また、女性自身やその家族があえて結婚という手段をとらないケースもあった。総じていえば、生まれた子どもを手元で育てるかホスピタルに託すかの判断には、女性自身やその家族の経済的状況と、その安定を揺るがしかねない周囲の社会的圧力が影響したようであるが、そこには地域における産業や就労形態、家族・親子関係の変化、性的行動にたいする態度などの諸要因が大きく影響し、19世紀に入ってから時期につれて変化をみている。<sup>27</sup>

シーツ＝グエンの研究は、1980年代以降の社会史研究の流れを汲みつつ、先行研究の多くでも史料として用いられた請願書の分析によって、あらためてこの問題に挑んでいる。回転台に載せて施設の中に入れる「赤ちゃんポスト」を使い匿名で子どもを捨てることができたフランスとは異なり、19世紀のホスピタルは、子どもの受容の際に、書面と複数回の面接によってきわめて厳格な審査を行った。ディケンズもとりあげた「プランク」<sup>28</sup>の空いた様式に、「請願者」（母親）はまず、氏名、年齢、職業、居住地などの求められた個人情報を一基本的に自署で一詳細に記載しなければならなかった。「父親」についても同じような情報が求められた。いわゆるヴィクトリア朝的な特色が反映されているのは、続く「どうやって妊娠・出産にいたったか」の経緯が語られていることである。どうやって知り合ったのか、どのくらいの交際期間か、男の側から誘惑されたのか、暴力があったのか、酒が入っていたのか、結婚の約束をしたのか、そして相手が（そうである場合に）既婚と知っていたのか—請願者はこのような姦通罪の法廷審問と同様の質問に逐一答え、さらに毎週定時に委員会に出席して口頭審査を受けなければならなかった。

シーツ＝グエンは個々の回答による採否の割合などを詳細にデータで提示しており、これをジェンダー史とは違う文脈で読み解いてゆく展開の余地もある。ただ、この分析によって示されるのは、論考のタイトルが示す「ヴィクトリア朝の未婚の母」のおそらく実像ではない。請願の採否は、その子どもが、ホスピタルが想定するような状況のもとで、やむなく生じた不幸な出産の結果か否かにかかっていた。またチャリティの受益者は、つねに受動的だったわけではない。チャリティの受益層をなす一定水準以下の社会階層の人びとは、生活に困難が生じたときの選択肢としてその存在を心にとめ、使えるものは積極的に利用していた。実際に「ロンドンのホスピタル」は結婚しないまま子どもを産むという決断をしたイギリスの女性とその家族にとって、子どもと自分が生きていくための最後の選択肢として考慮されていた。彼女たちの答えには型にはまった常套句が少なくないが、彼女らは委員らの意をくんだ答えをしたかもしれないし、そのように助言をする者もあったかもしれない。したがってこの請願書が示すのは、未婚の母の実像というよりはむしろ、その期待されたイメージであったかもしれない。19世紀の請願書はことにそのことを念頭に置いて読むべきであろう。

ホスピタルの運営委員たちが、切羽詰まった請願者たちに酷ともいえる屈辱的な試練を課した背景には、ホスピタルにむけられていた厳しい批判があった。そもそもコーラムが捨て子救済に着手した動機でもあった、生後間もない乳児の遺棄による嬰兒殺し（infanticide）が、次世紀にはさらに大きな社会問題となっていたからである。犯罪史家C・エムズリーの提示する18世紀後半のウィルトシアのデータによれば、1752-96年に同地で発生した殺人の3分の1は「子殺し」であり、その4分の3

が非嫡出子の嬰兒殺しであった。<sup>29</sup> 1803年までその処罰は1624年の法令にもとづいて下された。同法では嬰兒殺しは故殺とみなされて死刑犯罪と規定され、しかも「死産」を主張する場合に要求される証拠の条件が厳しかった。18世紀半ばにはこの法を残酷で過酷だとみなす風潮が高まり、司法の場で寛容な裁量が發揮されるケースが増えたが、対仏戦争下の1803年にできた法令は、厳格化による非嫡出出生の抑制がはかられた。19世紀の未婚の母は、この厳しい法の適用下にあった。

1862年のあるパンフレットは、新聞記事などをよりどころに嬰兒殺しの事例を列記し、解決方法を提案しているが、非嫡出の女兒2人が生後間もなく殺害・遺棄されていた3番目の事例にはホスピタルについての言及がみられる。判事と検視官代理G・L・ブレントは、マリルボン・ワークハウスの会議室で死因審問を行ったが、最近同様のケースが2件あったと語るブレントは、嬰兒殺しが「驚くべき規模で急激に増加している」ので、何らかの策を講じるべきであると主張する。彼が考えるには、「もし捨て子や非嫡出子の受け入れのために国立の施設が設立されたとしたら、害悪は抑えられ、何百人もの子どもの命が救われて国のためになるだろう」。しかし、「ファウンドリング・ホスピタルと呼ばれるある施設が存在したのは事実だが、これは完全なまがい物で、創設者の意図を實踐していなかった」。この彼の意見には、判事も同意している。<sup>30</sup>

パンフレットの作者がさらに指摘するのはこの犯罪行為を看過した父親の法的責任である。列記した事例のうち、被害者が非嫡出子である7件のなかの3件は父親が完全に特定できたが、現行制度では彼には責任が問えない。解決策として著者は、教区官吏に権限を「回復」させて、子どもの父親を訴えることができるようにすべきだと述べる。彼らは女性の収監中に5～10ポンドが取り戻せるなら訴える気になるはずであり、教区はこのようなケースを必ず訴えねばならないようにすべきであると主張する。また子どもの父親が女性を収監中に養い、週につき最低18ペンスを支援しているのでなければ、彼はつねに従犯人として扱われるべきであるとも述べている。

「回復」という表現は、1834年の改正救貧法によって非嫡出子の処遇が救貧の管轄下に置かれ、それまで金銭の支払いが求められることで子の父親が負っていた責任が問われなくなった状況を背景としている。ギリスは非嫡出子を生んだ女性たちの中には、子どもの父親に結婚ではなく、自分と子どもの生活費を求めることを選んだ事例を示している。<sup>31</sup> 子どもの父親であることを彼が認めながら要求に応じない場合、女性が訴えれば教区官吏は強制力を発動できたし、そうするとほめかすことによって、彼女たちは未婚の母として子どもを育てるという自分の希望を通すことができた。改正救貧法以降、子どもの遺棄は増加し、ホスピタルなどへの受容申請数も激増した。<sup>32</sup>

19世紀のホスピタルの指導者のなかでも強い影響力をもったブラウンロウも、この不幸な犯罪を減じるために捨て子院が重要であることを強調していたが<sup>33</sup>、世論は慎重であった。1873年のパンフレットでハリスは「大陸諸国のように乳児院や捨て子院がたくさんあると、非嫡出子の出生や捨て子の増加が示すように道徳を低下させる影響が生じる」ことを懸念しているが、これはホスピタル設立当初から一貫して根強い慎重論であった。ちなみにハリスが代替策として主張するのは授産学校（Industrial Schools）への収容であるが、この時期に彼が「貧民の子どもすべてを支援し世の中に送り出す」ことを「国家の義務」と位置付けていることは、前掲のパンフレットで検視官代理ブレント

が「国立の」捨て子院の設立を求めている主張と通じるものがある。すなわち、非嫡出子、孤児、浮浪児といった、多くは貧しい子どもたちの養育と教育は、いまやチャリティから国家の責務へと移行していた。世紀前半には救貧院の収容児童をさし、世紀半ばの感化院運動でここに刑務所の中の子どもを加えた「国家の子どもたち」という表現は、世紀後半により広い範囲の子どもたちをさすものへと変化してゆくのである。

さきにあげたブレントの言が示唆するように、19世紀のホスピタル周辺におけるいまひとつの特色は、創設者コーラムの再評価と称揚であろう。19世紀は、傑出した個人が賞賛された時代であった。同時代人は社会的名声を得、過去に生きた人びとはイギリスの歴史の中にその功績を刻まれた。歴史的な偉人についていえば、そのゆかりの地に銅像や記念碑を市民参加で建立するメモレーションのブームが、その例証であろう。<sup>34</sup>すでに18世紀からホスピタルは高い認知を得ており、その創設者であるコーラムの名前も広く知られるところであったが、彼自身の評価は19世紀に高まった。

ホスピタル自体の評価はどうだろうか。指導層の対立、無理な事業拡張がもたらす財政難と人材不足、国家支援の代償として強いられる方針転換、その結果としての支持者の喪失—19世紀のチャリティの多くがつまずき、ときに息の根を止められた諸問題を、ホスピタルは18世紀の時点ですでに経験していた。そもそもホスピタルは受容対象が乳児であることから、母乳を与えられるウェット・ナースを乳児の数に見合うだけ確保しなければならないという決定的な制約があった。前述のような運営上の諸問題のうち、少なくとも子ども救済チャリティの失敗は、受容の条件緩和と数の増やしすぎに起因するケースが多くみられる。先に示したシーツ＝グエンの研究は、ヴィクトリア時代の厳格な性規範が、受容審査の厳格化におそらくは影響を与えたであろうことを示している。ホスピタルが安易な子捨てを助長するという懸念についていえば、対象を非嫡出子に限定したことで、前章にあげたレヴンの18世紀の統計が示していた2割の嫡出子を排除することになり、ひとまずの成果をもたらしたといえるだろう。

いっぽう、ホスピタルは同時代の小説や戯曲、絵画にしばしば登場する。19世紀の収容施設で採用されてゆく制服は18世紀から導入されていたが、恵まれない子どもたちに「きれいな服」を着せることは、19世紀に重要性を増していた。第一の要点は「清潔」である。臨床・実験の場でもあった18世紀のホスピタルにおいて、パトロンでもあった著名な医師たちの助言で採用されていた保健衛生の諸策は、19世紀には他の収容施設にも取り入れられた。「病院や監獄、精神病院など、ひどい場所というイメージをもたれるジョージアンの収容施設では例外的」<sup>35</sup>な、整然と並んだ一人一つのベッドや白いシーツ、清潔感のある服装は、ドレらの挿画家が描いたおどろおどろしいワークハウスや刑務所の情景が想起させる「ヴィクトリア朝的」な収容施設とは対照的な印象を与えた。

このようなホスピタルのイメージは、当時の文学作品や絵画に登場する理想化された捨て子や孤児のそれに少なからぬ影響を与えている。<sup>36</sup>音楽の効用も大きかったであろう。18世紀におけるホスピタルは、監獄や精神病院と同様にその収容者を含めての「見世物」であり、音楽や美術は暇つぶしにきた金持ちをさらに楽しませて、気前よく寄付金を落とさせるための娯楽であった。チャリティの娯楽性というこの要素は、近代のチャリティの社会的意義や機能を考えるうえできわめて重要な点で

あろう。見栄えのいい制服や、合唱に楽器演奏、整然とした行進や行儀のよいふるまいは、慈善パーティーのだし物であり、清潔な寄宿舎という舞台にあるこのような子どもたちの姿は「ピクチャレスク」な愛でるべき景観であった。<sup>37</sup> 打ち捨てられた罪の子がこざれいに身なりを整え、整然とベッドが並ぶ寄宿舎で規則正しい生活を送るさまは、目にみえる成果として施設を訪問した人びとを満足させた。ホールに響く「メサイア」は、罪の子の浄化というチャリティの「成功」と、その宗教的意義を確信させるにふさわしい効果をもたらしたであろう。

## おわりに

19世紀における「停滞」を、「時代に流されなかった」とするピューの記述は、現代のホスピタルとその関係者であった彼女の誇りを含んでいる。この含意の背景にあるのは、1980年代以降、ヴィクトリア時代における子どもチャリティの暗部として注目を集めている「子ども移民」問題である。貧しい子どもたちをカナダやオーストラリアへ送り出すことによって、かれらに新天地での希望を与えると宣伝されたこのチャリティには、子どもたちを親から引き離し、僻地での過酷な重労働を強い、雇用主の虐待のもとにおいた事例が少なからず含まれていた。人びとを驚愕させたのは、歴史的事実や文学作品の中のエピソードとしてある程度の認知を得ていたこの「過去の蛮習」が、第二次大戦後も1960年代まで行われており、しかも政府がこれを支援していたという事実であった。バーナード・ホームやフェアブリッジ協会など、このチャリティを推進した団体には今日なお存続しているものが少なくなく、真実の解明を求める動きに当初抵抗を見せていたが、事実の存在を認めて資料を開示する傾向にある。今世紀になってから、責任を認めようとしなかった各国政府も次々に謝罪に踏み切り、被害者の支援に乗り出している。<sup>38</sup>

ホスピタルの誇りのひとつは、子どもの救済と帝国の繁栄を両立する施策として、世紀転換期にもてはやされたこの子ども移民を「ほとんど行わなかった」がゆえに、今日その罪科を問われることがなかったという事実にある。さらにもうひとつの自負は、福祉国家となって子ども移民から撤退したイギリス政府が、その代替策として採用したのが、自国のボランティアに子どもを託す里子制（boarding-out）であったということである。帝国移民から里子制への転換は、子ども移民の盛期にもすでに議論されており、実際に採用した団体もあったが、これを収容施設で最初に採用したのは、たしかに18世紀のホスピタルにほかならない。

ジョージ朝という時代には例外的な「先見の明」としてホスピタルが誇るこれらの事実はしかし、表層にすぎないかもしれない。紆余曲折を経て19世紀を迎えたホスピタルは、偉大な創設者コーラムの理想の体現こそが使命であると自らに任じていたし、ホスピタルの批判者もまた、それが履行されていないことをこそ問題視していた。しかしながらそのコーラムの理想とは、盟友ハンウェイのそれと同じく、重商主義的博愛精神と功利主義にもとづいた、余分な人的資源の有効活用であり、ハンウェイの事業と同じく、海を越えた植民地とその勢力圏をめぐるライヴァル国との競争を視野に入れたきわめて帝國的な性格を帯びていた。このことを鑑みれば、ホスピタルが子ども移民運動の時代にあつて、少なくともこれに積極的な参与をすることがなかったということこそが、むしろ奇異に映る。



実際には、ホスピタルはこのコーラムの理想を間接的にではあるが実践していた。18世紀から密接な関係にあったマリン・ソサエティは、19世紀にあっても子どもたちを海に送り出す窓口であったが、子ども移民を推進したチャリティのいくつかとも、ホスピタルは提携関係を持っていた。また、ホスピタルの出身者が救貧施設に送られれば、教区から委託を受けた移民団体を介して植民地に送られる可能性もあった。若年でかつ本国に身寄りを「もたない」ホスピタルの出所者は、ためらいなく植民地に送り出すことができる候補者のリストの筆頭に上がる部類の教区貧民となったであろう。罪を犯して有罪判決を受ければ、流刑制度の廃止以前であれば囚人として、廃止以後であれば博愛協会等の民間矯正施設からの移民として、やはり植民地に送られる道があった。

ホスピタルの直接的な史料からは見えにくいこのような実態は、他団体や裁判・刑務所の史料に登場する子どもたちの履歴の中から、ホスピタルの経験を洗い出すという精査が必要になるだろう。もうひとつの方法は、このような施設・団体の収容者リストの横断的照合である。19世紀の民衆にとって、チャリティは自身のおかれたさまざまな状況によって選び取る可能性がある選択肢であった。子どもたちの場合は、本人だけではなく親ないし家庭の状況の変化が、その選択肢を規定する条件ともなった。母親が引き取りにきたホスピタルの子どもは、母親が失業すれば教区救貧や別のチャリティの受益者となりえた。母親が再婚しても継父と折り合いが悪ければ、家を出て路上の「孤児」となり、バーナードの「博愛的誘拐」の対象となる可能性もあった。あるいは軽微な罪を犯して温情ある判事の前に連行され、刑務所の代わりに博愛協会に身柄を託され、模範生として移民の「恩恵」を与えられたかもしれない。

実態の解明は次稿における史料の精査にゆずるが、見通しとして立てられるのは、ホスピタルは確実に帝国への道を有していたということだ。子ども移民の歴史を概観するうえで、このような方向からのホスピタル研究が寄与するであろうもっとも重要な点は、ホスピタルが掲げたコーラムの理想と、19世紀において機能した現実のルートにおける「帝国」およびその概念の類似ないし相違である。世紀転換期の子ども移民運動は、18世紀の重商主義的博愛の懐古主義的な再現なのか、それとも異質なもののなのか。20世紀初頭においてみられた「帝国の建設者」としてのコーラムの再評価は、どのように位置づければよいのか。<sup>39</sup> ホスピタルの事例は、子ども移民の長い歴史を俯瞰するうえで最も重要な論点となるであろうこれらの問いに、答えを見出す助けとなるかもしれないのである。

## 註

1 たとえば、Eustace, Katharine, 'The key is Locke: Hogarth, Rysbrack and the Foundling Hospital', *The British Art Journal*, Vol. 7, No. 2 (Autumn 2006), pp. 34-49; Hogg, Katharine, 'Handel and the Foundling Hospital: The Gerald Coke Handel Collection at the Foundling Museum', *Fontes Artis Musicae*, Vol. 55 Issue 3 (Jul-Sep 2008), p.435-447; Roach, Catherine, 'The Foundling restored: Emma Brownlow King, William Hogarth, and the public image of the Foundling Hospital in the 19th century', *The British Art Journal*, Vol. 9, No. 2 (Autumn 2008), pp. 40-49、岩佐愛「捨子養育院における芸術と慈善—ヘンデルの〈メサイア〉慈善演奏会の背景」『武蔵大学人文学会雑誌』第41巻、第3・4号（2010年3月）、608-574頁など。

2 Nichols, R., and Wray, F. A., *The History of Foundling Hospital*, London, 1935.



- 3 McClure, Ruth K., *Coram's Children: The London Foundling Hospital in the Eighteenth Century*, New Haven: Yale University Press, 1981.
- 4 Levene, Alys, *Childcare, Health and Mortality at the London Foundling Hospital, 1741-1800: Left to the Mercy of the World*, Manchester: Manchester University Press, 2007.
- 5 Sheetz-Nguyen, Jessica A., *Victorian Women, Unwed Mothers and the London Foundling Hospital*, London: Continuum, 2012.
- 6 Gledhill, Jim, 'Coming of Age in Uniform: The Foundling Hospital and British Army Bands in the Twentieth Century', *Family & Community History*, Vol. 13, Issue 2 (Nov. 2010.), p114-127. わが国では、小林章夫のマクラーの通史紹介（「<書評>捨て子育児院を通して見た18世紀イギリス」同志社女子大学『総合文化研究所紀要』第1号（1984年）、149-52頁）と、コラムを中心としたホスピタルについての詳細な記述（『ロンドン・フェア』髪々堂、1986年）が、ホスピタルを取り上げた論考としては時期の早いものであろう。児童福祉制度史や児童法制史においては、非嫡出子や捨て子の保護制度ならびに関連立法との関連で言及されてきた（たとえば桑原洋子『英国福祉制度史研究』法律文化社、1989年、60-62頁など）。近年の山口真里「18世紀イングランドの捨て子処遇における「家族」と「教育」——ファウンドリング・ホスピタルからハンウェイ法へ」教育史学会『日本の教育史学』第43号（2000年）、195-214頁は、創設の経緯についても詳しい。
- 7 Pugh, Gillian, *London's Forgotten Children: Thomas Coram and the Foundling Hospital*, Stroud/Temps, 2007.
- 8 たとえば、McCure, *op.cit.*, p.249; Pugh, *op.cit.*, p.81.
- 9 Cf., Booth, William, *In Darkest England and the Way out*, London, 1890.
- 10 Cunningham, Hugh, *Children and Childhood in Western Society Since 1500*, 2<sup>nd</sup> ed., Routledge: London, 2005, p.150（北本正章訳『概説 子ども観の社会史—ヨーロッパとアメリカからみた教育・福祉・国家』新曜社、2013年）、北本正章「「子どもの発見」に関する教育思想論的考察：捨て子・野性児・ルソー」青山学院大学『教育人間科学部紀要』第2号（2011年）、45-63頁。
- 11 Cunningham, *op.cit.*, p.151.
- 12 橋本伸也・沢山美果子編『保護と遺棄の子ども史』昭和堂、2014年、40頁。なお、同書および次註の文献は、子どもの遺棄と保護をとりあげた学際的比較研究プロジェクトの成果である。
- 13 中村勝美「「保護と遺棄」をめぐる研究動向—ヨーロッパ（イングランド）を中心に」『子どもの保護・養育と遺棄をめぐる学際的比較研究：ディスカッション・ペーパー』Web版、第1号。（<http://kgur.kwansei.ac.jp/dspace/handle/10236/3511>）2010年、11-15頁。
- 14 Foyster, Elizabeth and Martin, James eds., *A Cultural History of Childhood and Family in the Age of Enlightenment*, Oxford; Berg, 2010, p.41.
- 15 ラスレット、ピーター、川北稔・指昭博・山本正訳『われら失いし世界—近代イギリス社会史』三嶺書房、1986年、217頁、図2を参照。
- 16 同書、218頁。
- 17 川北稔『民衆の大英帝国』岩波書店、1990年。
- 18 北米植民地での造船業ならびにコラムの事業については、村上公久「英海軍と新大陸の森林：独立戦争前期の森林資源争奪」『聖学院大学論叢』15巻（2003年）、323-342頁を参照。
- 19 人口減少説については、川北、前掲書、176-78頁を参照。
- 20 ハンウェイについては、Taylor, James Stephen, *Jonas Hanway: Founder of the Marine Society*, London: Ashgate, 1985が詳しく、博愛事業を通じたコラムとの関係についての言及も多い。
- 21 たとえば川北は1756年にハリー・ポーレット卿が海兵転用のためホスピタルから10名の収容児を引き取った事例をあげている（川北、前掲書、170頁）。
- 22 *The Royal Charter, Establishing an Hospital for the Maintenance and Education of Exposed and Deserted Young Children*, London, 1740, p.3.
- 23 Brownlow, John, *Memoranda; or, chronicles of the Foundling Hospital, 1847*, London, 174-175.
- 24 レヴンは個別の施設を対象とした複数の先行研究をもとに、スペインの3施設で55.1-86.5%、フィレン

- ツェでは50-80%、フランスの2施設では75.3-94.6%、ダブリンでは89.0%という数字を挙げている。(Leven, *op.cit.*, p.50, table 3.1)
- 25 *Ibid.*, p.57, table 3.3より。
- 26 *Ibid.*, p.36, table 2.8.
- 27 ギリス、ジョン・R、北本正章訳『結婚観の歴史人類学—近代イギリス・1600年～現代』勁草書房、2006年、第4、6および8章を参照。
- 28 ディッケンズとホスピタルの「ブランク・チャイルド」については、Taylor, Jenny Bourne, 'Received, a Blank Child: John Brownlow, Charles Dickens, and the London Foundling Hospital - Archives and Fictions', *Nineteenth-Century Literature*, Vol. 56, No. 3 (December 2001), pp. 293-363を参照。
- 29 Emsley, Clive, *Crime and Society in England 1750-1900*, 4<sup>th</sup>. ed., Harlow; Pearson Longman, 2010, p.43, table2.2. とくにヴィクトリア時代の非嫡出子問題については、Higginbotham, Ann R. "Sin of the Age": Infanticide and Illegitimacy in Victorian London', *Victorian Studies*, Vol. 32, No. 3 (Spring, 1989), pp.319-337.
- 30 Anon., *Infanticide and its Cause*, 1862, p.4.
- 31 ギリス、前掲書、291頁。
- 32 同書、386頁、Brownlow, John, *Thoughts and Suggestions Having Reference to Infanticide*, 1864, p.44.
- 33 *Ibid.*
- 34 たとえば、光永雅明「記憶と歴史：ロンドンにおける屋外銅像集団の設立運動と帝国、1870ごろ-1914」神戸市外国語大学『研究年報』35（1998）、41-73頁。
- 35 Porter,Roy., 'Points of Eutry: The Foundling Hospital', *History Today*, vol.38, Issue3 (March 1988), pp. 61-62.
- 36 Weisbrod, Bernd, 'How to Become a Good Foundling in Early Victorian London', *Social History*, Vol. 10, No. 2 (May, 1985), pp. 193-209, Peters, Laura, *Orphan Texts: Victorian Orphans, Culture and Empire*, Manchester Univ Press, 2000.
- 37 金澤周作『チャリティとイギリス近代』京都大学出版会、2008年、243頁。
- 38 森本真美「世紀転換期以前のイギリス子ども移民—「子ども移民運動」前史の意義」世界子ども学研究会『HALCYON』第4号（2014年3月）、1頁。
- 39 たとえば、Compston, H. F. B., *Thomas Coram, Churchman, Empire Builder and Philanthropist*, London: SPCK, 1918など。

